

第100回 岡山外科会記念講演会

日 時：昭和61年 5月24日（土）13時30分より

会 場：岡山市プラザホテル新館 5 F 延養の間

会 長：折 田 薫 三

（昭和 年 月 日受稿）

1. 整形外科領域におけるマイクロサージャリー

川崎医科大学整形外科 山 野 慶 樹

この10数年間にわたる microsurgery の発展は目ざましく、整形外科領域においては切断肢指の再接着から、複合組織移植、脊椎外科への応用、末梢神経外科、その他無腐性骨壊死の治療まで多方面にわたっており、これらについて

自験例について述べた。手技的には1/5～1/10 mm の血管吻合が可能となっているが、fine な atraumatic な手技をして今後益々発展利用されるであろう。

2. 私たちの Tissue-expander の使用経験

川崎医科大学形成外科 岡 博 昭

分割切除しなければならない程の大きさの母斑や癬痕でも近接皮下に埋没された特殊なシリコン性バッグ (Tissue-expander) を用いることによって一期的な切除が可能となった。バッグへは1週間おきに容量の10%から20%の生理食

塩水の注入を行った。約8週間後緊満したバッグをとりだし、新しく余裕の生じた皮膚を切除予定部位へ伸展した。今回私たちは、頭部の母斑・癬痕3例に対し Tissue expander を用いて切除を行った。

3. 最新の吸入麻酔薬と筋弛緩薬

岡山大学医学部附属病院麻酔科 太 田 吉 夫

現在臨床治験中の新しい麻酔薬について概説した。イソフルレンは吸入麻酔薬で導入、覚醒が速く、ハロセンとエンフルレンの中間の麻酔力を持ち、エピネフリンによる不整脈発生を増加させる作用が無く、また痙攣誘発作用もない。

ベクロニウムはバンクロニウムの誘導体で筋弛緩作用はバンクロニウムよりやや強く（約1.3倍）、作用時間はバンクロニウムの1/2以下で、副作用は全く無く、腎不全患者においても通常どおり使用できる。

4. 血管外科の診断と治療における最近の知見

川崎医科大学胸部外科 藤 原 巍

近年、手術年齢の高齢化と適応の拡大により動脈硬化性血管疾患の手術の著しい増加をみた。当科における過去10年間の血管外科手術例をもとに動脈瘤の治療成績、末梢動脈閉塞性疾患の診断、治療の最近のトピックスについて報告した。末梢動脈疾患では従来の血管造影による形態的診断のほか、thermographyによる末

梢循環の機能的評価の意義は大きく、限局性の狭窄に対しては適応を選べば経皮的血管拡張術(PTA)は侵襲が少なく、今後広く使用されるべき手段と考えられた。

thermography 及び PTA について症例を提示した。

5. 心臓外科の現況

岡山大学第二外科 妹尾 嘉昌

開心術下に心臓疾患を修復することは、それが可能になってわずか40年しか経っていないが、麻酔・諸薬剤などの進歩を背に、1つは体外循環、いま1つは心筋保護法という2つの大きい補助手段の病態生理の解明と、それにもとづく両法の改良により、極く一部機能的修復にとどまるものを含めれば、もはや修復不能なものはないといっても過言ではない状況に達した。

その反面、形態学的修復を行なっても、術後の quality of life を向上させ得ない病態の存在

も明らかになりつつある。先天性心疾患群における不可逆性肺血管病変、後天性弁膜症における手術時期の遅れによる弁膜症性心筋症、虚血性心疾患における広範囲心筋構造破壊さらには内科的治療の効果も期待出来ない心筋症などが挙げられる。

これらへの対応策として機械による機能代行あるいは移植などが可能性をもった方法として研究・開発されつつあるのが現況である。

6. 消化器癌に対する IVH 下化学療法

川崎医科大学消化器外科 木元 正利

最近発達した経静脈的栄養法は広く臨床に応用されているが、本法が抗腫瘍化学療法上に種々の利点があることが知られている。

私たちが高カロリー輸液下に 5-Fu を大量に

負荷する方法を考案し良好な結果を得ている。

今回は動物実験による基礎的検討から臨床例における血中濃度の推移などについて示し、代表的症例を挙げて報告した。

7. 肝癌の治療

岡山大学第一外科 浜崎 啓介

教室で経験した235例の肝細胞癌症例の検討より以下の結果を得た。

- 1) 肝血流指数の導入により残存肝予備力の正確な把握ができるようになり術後の肝不全死は殆んどみられなくなった。
- 2) 早期肝癌の予後は良好で5年生存率も45%

と良好であった。

- 3) 進行肝癌に対しては手術療法と同時に TAE などを中心にした集学的治療が必要である。
- 4) 非切除例でも TAE の繰り返しにより21%の3年生存率が得られた。

8. 転移性脳腫瘍の治療

川崎医科大学脳神経外科 鈴木 康夫

転移性脳腫瘍は最近増加の傾向にあるが、その治療方針については議論の多いところである。そこで今回、放射線療法の有効性について検討し、次の結論を得た。

1) CT上の奏効率は66%、症状改善率は76%で、放射線療法はきわめて有効な治療法で

あると思われた。

2) 従って、状態の悪い場合など、まず放射線療法を優先させるべきであると考える。

3) 死因が脳転移巣であったものは26%と低く、今後は原発巣などへの対策が重要である。

9. 脳神経外科領域における最近の intravascular Surgery.

岡山大学脳神経外科 衣笠 和孜

血管内手術による塞栓術がおもに、脳動静脈奇形、内頸動脈海綿静脈洞瘤、腫瘍の栄養血管閉塞に用いられており、塞栓物質としては gol-

foam, silicone, sphere, Ivalou, IBCA, siliconefluid mixtures, occluding spring embolus, defachable balloon を使用した症例を報告する。

10. 大腿骨転子部骨折の治療

岡山大学整形外科 花川 志郎 定金 卓爾 田辺 剛造

高令化社会にともない、大腿骨転子部骨折の症例は増加している。

大腿骨転子部骨折の内固定材料として、現在我々は Compression Hip Screw を用いている。この Compression Hip Screw を用いて手術した症例は33症例、男4例、女29例、年齢は56才から92才、平均年齢は79才であった。受傷原因として入院中の病院内の廊下、便所での転倒が約

半数を占める。退院時の歩行能力についてみると、骨折のタイプに関係なく、受傷前独歩していた症例が結果がよく、脳出血、痴呆などの中枢神経系の障害を合併した患者の中にベッド上生活となった症例が多かった。骨癒合は全例に得られた。

今後早期手術、早期離床を原則に、老人の社会復帰の向上をはかりたい。

特別講演 外科の目標とその将来

榎原 亨

在来の外科の目標は、その手術法を研究進歩させ疾病を治癒せしめんとするにあった。

然るにその研究進展に伴い、在来の手術能力の限界次第に明らかになり、その限界を越すには在来のメスにのみ依存する愚を知ったのであった。ここに新たに先端技術の應用、薬物免疫療法等の研究成果、古来よりの伝承治療法の再検討等の導入が試みられて来た。此傾向は最近10年間の日本外科学会総会の発表一般演説の動向によっても明らかである。

演者は演者自身古来伝承の治療法を再検討し

た経験を述べる。

在来外科の目標は手術により患者の肢体の一部を切開、切除し奇形の状態で患者を治療したのであったが、今や斯様な外科的療法の限界を認めるにつれ、完全な肢体としての真の治療を期する様に向いつつある。

古来よりの外科の目標は次第に傾斜しつつも人類幸福のため新目標に向って進みつつある。極言すれば外科の目標は古来の外科を無くすることにある。